

## 国際協力特別賞

真の国際人になるためには

お茶の水女子大学附属中学校 3年  
森田 寛大

僕は海を見るといつも思い出す。あの日見た、南極大陸までどこまでも続いていく、地平線を。ずっと忘れないだろう。あつという間に過ぎていった、あの一週間を。

僕がオーストラリアにホームステイにいったのは、小学校 6 年生の夏だった。港区小中学生海外派遣の一員として、外国の文化に触れ、国際人としての基礎を培うという目的で、現地の学校に通いながら、一般家庭に泊まらせて頂いた。国際人というと、英語や相手の母国語を使って自由にコミュニケーションをとれる人のことだと思っていた。しかし、現地での生活を通じてその認識は間違っていたということに気がついた。

オーストラリアは移民を積極的に受け入れているため、多様な人種が集まる多民族国家だ。僕がホームステイさせていただいたのも、イタリア系のお母さんと、ギリシャ系のお父さんという家庭だった。バディのガス君はサッカーチームに入っていて、家に帰るとすぐに、チームの練習に誘ってくれた。最初は遠慮がちに参加していた僕に、チームの子が「ナイスカンタ」や「カンタ足が速い」と、次々に声をかけてくれて、僕も次第に打ち解け、いつしか積極的にボールの輪に入っていた。その日の夕食では、パスタとギリシャサラダを食べながら、家族の歴史や文化について話してくれた。また、休日にはフットボールの観戦や、観光にも連れて行ってくれ、たくさんオーストラリアの話をしてくれた。ルーツをすごく大切にしていると共に、オーストラリア人としての誇りも高く持っているのだと感じた。

ふとその間、逆に僕は外国の方に、こんなに詳しく日本のことを伝えられるだろうかと考えた。世界を知ること大切だけれど、自分の国について知る必要があると感じた。日本に戻って、改めて国際人の意味を考えてみた。海外派遣を通じて様々なことを学んだけれど、何より大事なことは、お互いを認め合うことではないかと。日本人であろうが外国人であろうが、ひとりひとりを見つめ、どうすれば良好な気持ちでいられるかを考えた言動ができる人が、真の「国際人」なのだと。

あの日、オーストラリアで見た海は、南極大陸まで続いていた。初めて、世界はひとつなんだと実感できた。あの海のように、壁を作らず、普段の生活から、お互いを認め合い、そして、自分自身のことを理解し、相手に伝えることが「国際人」になるための第一歩だ

と強く思う。